

【プロフィール】

東伯郡琴浦町に生まれた刀工、一雲齋秀春（伯州秀春）は、本名を藤本和一郎と言い、文政4(1821)年8月、父、林蔵の長男として当時の八橋町に生まれました。天保9(1838)年17歳の時に汗入郡（現西伯町）の野鍛冶（包丁や鎌、鋏などを作る一般的な鍛冶屋のこと）の下で8年間奉公し、弘化3（1846）年菊里村八軒屋（現八橋地区）に帰り野鍛冶の仕事に従事します。2年後に結婚し、子どもにも恵まれますが、結婚生活は短く妻は嘉永6（1853）年に亡くなります。乳児を育てながらの仕事は大変で、周囲の勧めもあり、のちに妻の妹を後妻に迎えています。

詳細は分かりませんがこの後、江戸に出て、当時刀工として抜群の人気の大慶直胤の門人である山本嘉伝次秀直の弟子となり、5年間の修行の後、八橋町に帰り刀鍛冶として活躍します。この帰郷に際し、師匠の名前を一字貰い受け「秀春」と改名しています。

秀春が帰郷した当時、鳥取藩は尊皇攘夷運動の激化など世相が次第に不穏になる中で武力衝突の危機を予想し、鉄砲・刀など武器の製造・備蓄に注力していました。そして、秀春は明治維新を7年後に迎える万延2（1861）年2月、藩が新設した武器製造役所の御用間（ごようきき）に採用され作刀に励みます。そして、その働きぶりが評価され、慶応元（1865）年8月には「御職人並」に昇格しています。

明治以降も作刀しましたが、明治9（1876）年には廃刀令が出されます。この後は親子仲良く刃物、農具等を作りますが、刃物は切れ味が良く、長く使えると評判がよかったと伝えられます。

秀春の刀は長大で堂々としたものが多く、その作風は備前伝をよくし、鍛えは小杓目良く詰み無地風となり、刃紋は、匂の締まった直刃、独特の互の目の乱れ丁子刃などがあります。貧しいながらも作刀に精魂を傾け力作を作り、その刀は頑丈で折れず、曲がらず、良く切れると高い評価を得ていました。なお、秀春は「尚春」と銘する時期があり、一方長男甚太郎は「尚家」と切り、その後「直綱」と改名したと伝えられています。

秀春は、体力が衰えたのか廃刀令の前年、明治8（1875）年4月に家督を長男甚太郎に譲ります。そして明治22（1889）年1月、67歳で死去し、同町の菩提寺、法輪寺に葬られています。